

〈講演〉

子どもの貧困にどう行動していくか

法政大学現代福祉学部教授 湯浅 誠

「子どもの貧困にどう行動していくか」というテーマでお題を頂いているのでそれについて話したいと思います。

まずは2点。最初に「すごい貧困なわけではないけど、低所得で余裕のない家計の中で、家族の調整を負わされて育った優等生っぽい子」。大学にも相当そういう学生は多い。余裕のない家庭の中で、必ずしも夫婦の仲は良くない。子どもはなんとか自分で舵取りしようと、自分が良い子であることで家族を円満に保つというか、お父さんとお母さんが喧嘩をしないように頑張るというか、そういう役割をずっと負ってきて、表面的には非常に成績が良く、正にとっても良い子なのだが、住まいに行くとなっても大変。そういう想いを素直に話せないで、抱えている人。そういう人は大学では多いと感じている。

もう1つは、私の学部には生活保護家庭の子とかがいます。法政大学は私立大学ですから、一般的にはそれなりのお金のある御家庭の子が来ているはずだと思いますが、それでもやっぱりそういう人もいます。もちろん、奨学金を利用している人も、よく知られているように増えているし、最近、「家計がキツイし、奨学金返せる目途が立ちそうにもないし、就活も不安なので経済的に厳しいのだけど、奨学金を借りない」という選択をする家庭もちらちらと見られる。家計が厳しいのに奨学金を借りないとなると、アルバイトで穴埋めすることになる。そういう真面目な学生はちゃんと授業に出たりするから、朝の1限の9時

半から5限の18時20分まで授業がありますが、それが終わってからアルバイト。家計的にあまり楽ではない家庭の子は男も女も頑張って自宅から通ってくる。ここから都心まではかなり離れていますが、東京の東部、葛飾とか江戸川とか、ああいうところから来ている。すごい人になると市原から来ている。2時間とかかかる。そうになると朝の6時位には家を出て、9時から18時位まで大学にいて、2時間かけて家の近くに帰って、3時間バイトして、夜中の12時に家に帰って風呂入って、また朝5時に起きて6時に家を出るといった「猛烈サラリーマン」みたいな生活になっている。そういう人がそれなりの数いるな、という感じを受ける。もちろん多数ではないですけど。大学もそういうところにきているな、と実感している。

「貧困」という言葉とイメージが結びつかない。相対的貧困状態をクリアしているかもしれないが、その家計は詳細を見てないから分からないですが。ボーダーラインっていうかな、相対的貧困状態ではないかもしれないが、準相対的貧困状態くらい。階層的にいうと中の下から下の上くらいの間っていう感じ。ここがボリュームゾーンとして増えてきているな、という印象を私は持っています。中間層がちょっと落ちてきている。このボリュームゾーンが厚くなってきて、その一部が相対的貧困という形。ここが見えてきている。

全体は2006年の段階で15.8%、2009年は16.0%、2012年は16.1%、これは日本全体、

OECDが出した貧困率。子どもは2006年は14.2%、2009年は15.7%になり、2012年に16.3%になりました。伸び率を見て頂くと明らかに子どもの貧困率の方が上がり方が激しい。これは、先ほど話した「法政大学もこんな感じ」と直結している。これは何が言いたいかというと、子どもは収入がありませんから、「子どもの貧困率」「子どもの貧困率」と一般的に言っているのは、「子育て世代の貧困率」ということです。子どもは0歳から18歳のご家庭のご両親の家計が相対的貧困状態ということ。そのご両親は何歳かということ、20代・30代・40代です。つまり現役世代の人たちだということ。現役世代のお父さんお母さんたちの多くの方の場合、賃金が伸びない、あるいは落ちてきている。非正規になったり、拡大している。そういうことがこの数字になって表れている。子どもの貧困というのは子どもの話であるということでもあるし、子どもの親世代の労働環境、所得の話であったり、背中合わせになっている。子どもの貧困率がグイグイと上がっている背景と現役世代の厳しさ。現役世代の厳しさが必ずしも相対的貧困状態といえないかもしれないが、子どもに経済的なものとは別のしわ寄せをもたらしてきている。私は貧困問題とは経済的なものだけではない、精神的なものとか、気持ちの余裕や、人間関係や、「溜め」といっているんですが、溜池の「溜め」やプールとか、クッションとか。色んなことがあった時に自分を守ってくれるもの。人間関係色々あれば、何かあっても手助けしてくれる人がいたり、そういうのがなかったら、もろにダメージを受ける。お金がなかったら、仕事失ったら次の仕事探さなくてははいけないし、条件が悪くてもその仕事に就かなくちゃいけない。お金とか人間関係は「溜め」という機能を持っている。色んなレベルで弱まっていると感じます。なので、子どもの問題も経済的な問題だけではなく、相対的貧困状態がもたらす人間

関係の問題がある。

すごくわかりやすくいうと、中学生も高校生も大学生も年に1回はディズニーランドに行きたいっていう話になる。友達同士で話をしている時に、その家庭の子はなんて言うかということ「私、やめとく」って言うことになる。「お金がない」とは子どもは言えないから、「付き合い悪いな」と周りは思うわけです。周りの子は行く前は計画を話して、行って帰った後も思い出話で盛り上がりたり、一連の話に加われない。だんだん友達の輪から離れていく。本人は自覚していないかもしれないが、外れていくわけです。そういう状態が及ぶのは経済的な厳しさだけではない交友関係に関わる。貧困とはそういうこともトータルに見ていくものであるということをお伝えしたいです。

では本題に入ります。どう行動していくかということ、ここに集まっているみなさんは少なからず意識と意欲と問題意識がある方だと思いますので、行動について話したいと思います。

基本的には3つの次元があります。1つは「対個人」。一人ひとりの子とどういう風に関わるか。例えば学習支援の現場、後でご報告もありますが、当事者となっている子どもと関わっていく。対人支援・個別支援といった個別領域。これが1つ。もう1つは「対社会」。もう1つは「対行政・自治体・国含めた政治」。この3つの次元に分けてお話をしたいと思います。

「対個人」についていうと、基本は「生活者として見る」ということだと思います。外側の人たちから非常に誤解されやすいし、やむを得ない面もあるのですが。子どもの学習支援は学習のためだけにやるわけではない。あれは要は「ツール」です。私はホームレス支援をやっていました。ホームレス支援とい

うとみなさんのご想像通り、代表的な支援メニューとして「炊き出し」があります。ごはんを配ったり。「炊き出し」は何のためにやっていたかご存知ですか。「炊き出し」は飯をあげるためにやっているものでしょう、と思うかもしれないのですが、私たちの意識はそうではありません。「炊き出し」というのはホームレスの人たちが集まる場を作るためのツールです。週に1回、1食ごはんを提供したところで「あとの20食はどうするのですか」と言われても、どうにもできない。集まる場をつくることで横につながったりすることに意味がある。「ただ集まりましょう」といったところで誰も集まらないから、何か「ツール」を使って、集まる場を作る。その時に一番知りたいことは、「生活者としてのその人」。これはどの領域でも同じで、子どもに対する学習支援も、子どもの居場所作りも、子どもの食堂も、いろんな取り組みが行われていますが、基本的には「ツール」なのです。「生活者として見る」ということは、ホームレスとしてのその人の属性、貧困状態にある子どもの状態、だけで見ません。ホームレス問題を引き合いに出すのは、恐縮ですが、路上で野宿のおっちゃん達と笑い話をしていたら、風邪ひいて医者に行くと、お医者さんは「これを飲んでね。温かくして、栄養のあるものを食べて、安静にしてください」とよく言います。「温かくしている。栄養のあるものを食べている。安静にしている」ことが出来ているかどうかは聞いてもらえません。それは、「病気」は見てもらえるが、「生活」は見てくれないからです。ホームレスたちも笑いながらそのように返してきます。一緒に笑いますが、それは悲劇的なことでもあります。

極論をいうと学校もそういう意味では、教育の現場であると同時に、教育をツールとしながら子どもたちを生活者として見ることを少なくともできる場所。このことは公式見解と全く違うということで聞いてもらいたい

す。もちろん学校は教育の場です。これが公式見解です。だから子どもの生活は学校では見ません。それは家庭で見てください。これが公式見解です。だけれども、それだとだんだんと進まなくなってきたということがあるというのが今の現状です。支援活動と言われる様々な取り組みは、そこが違うということです。

支援活動といわれるメニューはあくまで道具で「ツール」です。それを通じて子どもの生活を見ようとしている、その子の家庭環境を見ようとしている。その子の生育のくせ、その子の持っている世界観や価値観の独特さを見ようとしている。それでどうやってその人（その子）と会話をするのか、チャンネルを探るためにしているのです。そこが支援活動の一番の特徴ですが、ただこれもやり始めた人たちの多くはそう思って活動を継続していこうと思うのですが、新たに入ってくる人たちはその意識がなかったりします。例えば、学習支援をしているところに、学習ボランティアがくる。それは、勉強を教えるだけなのでしょう、というつもりで来ます。それが「ツール」という意識がなかったりします。ということで、段々と形骸化していってしまう。そのため、常にそういう意識がある人が後輩たちに伝えていかないといけないし、運営をしている人たち同士で、常に確認していかないといけないだろうと思います。

医療も、福祉も、教育も対象は子どもだろうと、相手が認知症だろうと、患者さんであろうと、基本的にその「ツール」を持って、相手を生活者として見ながら、その人の生活を考えることが対人支援の基本的なスタンスということをして1つ強調しておきたいです。

「自分は全く勉強が出来ません、教えられません」といった時に「学習ボランティアに来てもらって構いません」と。別に学習ボラ

ンティアに学力が高い人に来てもらいたいということはあるかもしれないが、それは何か勘違いしています。そういうことではなくて、何が教えられるのかではなくてそれを通じて繋がったり、その人の背景を見てもらうことが大事です。そういう意味で、自分は料理が得意ではないから子ども食堂にいけませんとか、「ツール」に縛られて判断する必要はないということを強調しておきたいです。むしろ、子どもの生活に問題意識を持っているならば入り口は何でもいい。「ツール」は何でもいい、学習支援だろうと、子ども食堂だろうと、医療系でもいい。特別なスキルを持っていなくても行って大丈夫。ぜひのぞいて見てもらいたいと思います。むしろ、実際に続くかどうかで決定的に遠慮するというよりかは、そこに行って楽しいと感じるとかの方がはるかに影響力が高い、一緒にやっているボランティアたちが自分にとって魅力的だと感じているのか、一回行った時に受け入れてもらったとか、なんかここに楽しそうな人がいるなど思えたとか、子どもと一回目の関わりがうまくいったとか、そういうことの方が、何をやるにしてもはるかにその人が続くのかということに影響します。こればかりは行ってみないとわかりません。私の色々受け入れてきた印象でいうと、「自分はこれをやらねばならない」ことで頭をでっかくしてきた人は続かない。なぜならば、現場は自分のイメージと必ず違うから、「俺の思っていた現場と違う、俺はこんなことをするために来たのではない」となってしまうから、あまり来なくなってしまう。結構続くなと後から見て思うのは、全然立派な動機が何もない人。夏休みに先生が「どこかでボランティアをやって来なさい」と言われた、「何にも興味がないからとりあえず探してたまたまここに来ました」、「何にも問題意識はありません」というような人が10年続きます。それはそこに来て楽しいと思ったから、あるいは、最初の期

待値が低かったから、結構面白いと思ったからなど、色々あるのでしょうか、案外そんなものなのです。対個人でいうと、「生活者として見る」、いろんな支援を「ツール」として見る、ということと「とりあえず行ってみましょう」と。真面目な方がよくおっしゃられるのが、「そんな中途半端な気持ちで行って、自分みたいなのが行って良いのでしょうか、かえってご迷惑になるのではないのでしょうか、そんなのは偽善になるのではないのでしょうか」と悩まれます。悩んで、悩んで一步を踏み出せないということはよくあります。受け入れる側は一回来てもらって来なくなることは慣れていきますから、大丈夫です。一回来て来なくなる人とは山のように会って来ましたから、「またか」で終わります。「あの人はなんで来なくなってしまったのだろう」で悩まないのが、気軽に行って、合わなければ行かなければいいです。そういう人には慣れていきますから、大丈夫です。そういう意味で、気楽にやって頂けたらと思います。これが個人の行動としての対人支援です。これが一番実態がわかります。当事者の声が聞けます。「こういう子たちなのだ」ということが理屈ではなくわかります。そういう意味では一番最初の時にぜひおすすめしておきたいところです。「お前を観察しに来たぞ」という雰囲気は出しちゃだめですよ。そんなことをしたら子どもは警戒してしまう。「知りたい、わかりたい、教えてもらいたい」という気持ちであればこれが一番だと思います。ただし、これだけでは十分とは言えないです。

ということで、あとの2つの次元があります。

2つ目は「対社会」ですが、これは先ほどの「生活者として見る」というようなキーワードのように一言でいうと、「耳を傾けてもらう」ということなのかと思います。

どうということかという、この問題に関心

がない人、それはどうせマスコミや一部の人間が騒いでいるだけだろうと思っている人、そういう人に耳を傾けてもらうというのが「対社会」という次元です。先ほども言ったように、「6人に1人」という数字は、その人自身が持っている貧困イメージとは合いません。その人から見るとこう言います。「本当にそんなにいるのか、だってみんな学校に行っているのではないか、飯くっているのではないか、俺の小さい頃は、コメ一粒もなかったぞ、弁当持って来れなかったやつはいくらでもいたんだぞ、学校給食があるのではないか、何を贅沢いつているのか、靴を履いているのではないか」という感じです。そうなります。その人がイメージするのは絶対的な貧困ですから。しかし、現実的に6人に1人は相対的な貧困ですから。

修学旅行に行けない子がいる、夏休みに体重が減ってしまう子がいる、これは一日で一番栄養のある食である学校給食がなくなるからです。学校給食がなくなる夏休みは体重が減ってしまう。そういう子がいるというのは相対的な貧困の問題としては重要で、私としてはそれ自体は大事だと思いますが、絶対的な貧困のイメージからすると、「修学旅行に行かなくても別に死なないでしょう」という話になります。そのギャップが貧困問題全体としてもそうだし、子どもの貧困としてもそうだし、埋まりません。完全に埋まりません。相当変わりました。私はこれを始めて20年経ちましたが、20年の間に相当変わりました。それでもやはり「埋まりきりはしない」。やはりイメージと実態のギャップが社会の中にはあるから。そこは誰かが埋めないといけません。そのためにその仕事を私たちがやらないといけない、それが2つ目です。

これは色んなレベルがあります。マスメディアで話したり、本を書いたり、私自身はします。ただそれが出来る人ばかりではないのです。それではどうすればいいのか。それは

例えば大学生であれば、サークルで話してみるだとか、地域の方であれば、地域の会合で話してみるとか、働いている方であれば、職場で話してみるとか、あるいは、新聞やテレビに投書してみるだとか、そういうことが出来ます。

まず、後者からいきましょうか。新聞やテレビに投書してみる事は、しばしば「そんなことをして効果があるのか」という反応を引き出しますから、まずはそこを抑えておきます。効果はあります。多くの人が思っているよりもはるかに効果があります。これは授業で学生には話すのですが、「自分が社会問題に対して何かやっても、世の中はびくともしない。おれがここで何をやろうが、何を言おうが」と普通は思い、やる気が起きない。そういう風を感じていることの1つにそういうメディアへの働きかけみたいなのがある。「あんなでっかい新聞社、マスメディア、テレビ、びくともしないだろう」と思うかもしれません。

具体的に考えてみましょう。テレビのニュース番組に挟まれているような「今日の特集」、6分、8分、長いもので10分くらいです。それをやるのにどれだけの人がどれだけの時間をかけているのか。テレビ局のニュース番組は約8割下請けですから、外の会社のディレクターがやっています。だいたい1人かないしは2人でやっています。その人たちが8分の番組を作るのに大体、事前取材を入れて3か月かかります。最後の1週間は寝ません。自分の立場で考えてみてください。自分が準備の段階から、3か月かけて最後の1週間は寝ずに仕上げた作品がどう見られているのか気にならないと思いませんか。めちゃくちゃ気になります。それに対してみんなは反応してくれるのか。それは視聴率は出ますけども、視聴率は何も語ってくれません。何を見たかは語ってくれますが、どう思ったの

かは語ってくれません。誰が反応するのか。みんな「自分が反応したってどうせ」と思っています。大人も、子どもも。反応はほとんど来ません。5 通来たら「おっ、反応あったね」。10 通、20 通来たら「おっ、結構反応来たね」。100 通来たら大騒ぎですよ。続編やるかとなります。こんな反響が大きければ、必ず全部に目を通してあります。自分が3 か月かけて作った仕事だから、気にならないわけではない。そういう時に、「あれは良かった。こういうことはまた取り上げてほしい」というような励ましがあれば、「私だったら嬉しい」というようにおそらく皆さんが思っている以上に効果があります。「マスコミなんか…」とは思わずに、時間がある時にはそういうところに働きかけてみてください。基本的には投書や電話は、文句を言うために使うのですが、褒めてあげるために使ってあげてほしいです。「あれ良かった」と。けなされることには慣れている。褒められることはあまりないですよ。そういう意味でも褒めてあげてほしいです。そういうことは対社会において重要な働きかけのひとつです。

ただ、一般的にはもっと普遍的というか、自分の家庭、職場、サークル、学校、そういう場所でこのことをどう話すか、ということが日常的には大事で、これが前者です。これは非常に難しいです。ぜひ「作法」を磨いてみてください。

何が難しいかというところ、そういう話は基本的に嫌がられます。「皆さん、今日家に帰って、今日こういう話聞いてきた、子どもの貧困問題ってさあ」って話してみてください。そんな面倒くさい話は聞きたくないわけです。これが一般的な反応です。もちろん食いついてくる人はいるでしょうけど、そこがスタートラインだと思って頂きたい。まさに嫌がった時に、ゴングが鳴った、嫌がった時に、「チーン」と終了ではなく、まさに「スタートライ

ン」だと思って頂きたい。だって関心のある人は関心があるのだから、ほっといても関心がある。皆さんが働きかけなくたって。今日、この場、わざわざ平日の夜に、おなかが減った頃だと思いますがこれだけの方が来られたのは大したものだと思います。ご関心が高いという方たちですよ。関心の高い方は集まります。どんなシンポジウムだってそうです。関心の高い人が来ました。私みたいな人が話しました。皆さん、関心がより一層深まったかもしれません。これで、日本の人口における子どもの貧困に関心のある割合はどれだけ変わりましたか。このシンポジウムを通じて。変わっていませんよね。だって皆さん関心あるから来ているので。もともと関心がある人が来て、帰っていくのです。人口比的には、一人も増えていません。なので、関心のない人に関心を持ってもらわないと意味がないのです。意味がないというよりは、増えていかない。「対社会」という時には関心のない人にやらない限り増えていかない。関心のある人が増えていくことが良い。そういう風というと怖いのは無関心です。無関心を回避すること。そうすると、関心のない人にどう働きかけるかが大事になってくる。それはたぶん、「お前、こんなことを知っているか、あんなことを知っているか、今日こういうことを聞いてきたんだ、しゃべりたいんだ、聞け」ということではないはずです。多分、相手の言葉に耳を傾ける中で、話をこちらから絡ませていくようなテクニックが必要なはず。相手の関心がそれに少し向いた時にすかさず、相手の興味を持ちそうなテーマから入る。そういうことです。だから、「説得する」という言葉というよりは、「耳を傾けてもらう」といういい方を私はするわけです。「説得する」ということはどちらかというところ「こっちが相手押し倒すということ」です。それで関心のない人は振り向きません。もっと嫌になってしまいます。どちらかというところ、関心が持て

ないといっている人にフックをかけていくために話のネタや、個人のエピソードの場合もあるかもしれないし、こういう数字の場合もある。もしかしたら、子どもの貧困が増えることで安倍さんの言っている「名目 GDP 600兆円がいけないかもしれないよ」という話の方が「んっ？」となる人がいるかもしれません。あの手この手でその人の関心にフックをかけるということで耳を育てます。そのためにこれのままに言葉やアイディアの「ツール」で、こういうものを使って社会といった関心を広げる。これは「対人支援」とは違ったいろんな作法、ノウハウ、ツールがいます。そこにもぜひ意識を向けて頂きたいと思いません。

やはり大学で見ている奨学金を借りている子は相当いますが、奨学金の話はラウンジで昼飯を食べながらするかというところまでやらないですよ。そういう経済問題はあまり家計の事情には踏み込んで話さない、そういう風に踏み込まないというものになってしまっている。この作法を変えていかないといけない。いつになっても社会的な問題は、友達同士でも話したがるらない、家庭でも話さない、職場でも出ない。それでは関心が広がっていかない。そこを変えていかないといけない。これが2つ目です。あの手この手を鍛える。

3つ目は、政治です。政治には自治体、国いろんなレベルがあります。いろんなレベルがあるのですが、これを先ほどの「対個人」の「生活者として見る」あるいは「対社会」における「耳を傾けてもらう」といったキーフレーズに沿うようなキーフレーズとは何か？と考えてみたら、あえていうと、「49パーセントは捨てる覚悟でやれ」ということです。

政治の領域は自治体にしろ、国にしろ、都道府県もとても複雑になってしまっている。舞台が大きくなればなるほど、利害関係者が

多い。そして政策には多くの場合、お金がからみます。そういう意味で難しい世界です。その中でもある問題、例えば「子どもの貧困」に関して言うと、2013年に「子どもの貧困対策推進法」というのが出来ました。大綱というのが策定されて、今自治体で大綱というものが作られています。努力義務で、作る自治体もあれば、作らない自治体もある。国としては、全国調査を今度やると打ち出しています。今年から「子どもの未来応援基金」というのが出来ました。10月から動き出しているのですが、ほとんどお金が集まっていない。認知度が広がっていません。そういうことを動かしていくのは複雑な力学があって、自分でやっている NPO だと違います。自分でやっている NPO は、自分がやりたいようにやれる。政治は自治体にしろ、国にしろ、多くの官僚や政治家が関わっていて、その人たちの権限の方が私より強いんです。権限を持っている人は別にいる。自分の NPO を運営する人は、権限は自分にあって、国を左右する権限は私は持っていません。究極的には主権者ですから、究極的な主権は持っていますが、一つ一つの個別政策の権限は持っていません。その時には何かを通そうとすると、100言って100通るのはやはりあり得ません。どこまで妥協するのか。それは「49パーセントは捨てる」。捨てるかもしれないと思ってやる。それができたら成功だとしてやる。そういう中で様々な働きかけ方をいろんな人と相談しながら進めていくことになるだろうと思います。

この領域は特殊ですから、日常的にやられている人は多くないと思いますが、大事なことをもう一ついうと、そういう心構えでやるのですけど、もう少し一歩身近な話に戻すと、先ほどネットワークのお話がありましたが、今官民協働という領域が広がっています。その中で大事なことは通訳してくれる人。行政の理屈がわかって、一方で NPO の理屈がわ

かる人。この両方が分かる人が通訳ですね。通訳というのは、両方の言語が分かる人ですね。日本語だけがわかる人は、英語と日本語の通訳は出来ませんよね。両方の言語がわかって初めて通訳が出来る。ともするとここは官民協働、NPO が育ってきたいろいろな自治体を含めた子どもの貧困に関わりを持ってきた中で、全国的にこの領域だけではありませんが、あちこちでレスコミュニケーションが起きます。行政とそもそも言葉が、言語が通じない。行政の人達は、NPO の人達が言っていることが時々「この人は何を言っているのだろう」となってしまう。NPO の人達も行政用語が何を言っているのかわからない。「あなたは何が言いたいんだ」になってしまいます。そういう意味で、お互いの言語が通じない場面がちよいちょいある。そこは通訳がいると非常にスムーズになることがあります。なので、元行政マンで、リタイヤした方、あるいはそういうところにお勤めになられた方、民間にお勤めだったけど、行政との関わりが深くてそうしたところの作法がよく分かる方など、そうした方が両者の間に入って、いわば官民協働の土台作りをやっていきます。これはいろんなことが非常にスムーズに進みます。政治的な進捗が高まる。その意味では、そういうところにも力を割ける方がいれば構いません。

学校と学校外の関係も同じです。最近、「学校が」ではなく「学校で」といういい方があります。子どもの貧困対策の大綱でも「学校をプラットフォームに」という言葉があります。「学校で」ということは先生が丸わかりするわけではないよということです。先生は丸わかりはできませんよと。なので、学校教員以外の地元の人達にも入って頂きながら学校運営をやっていきましょう、ということです。

そして学校には先生以外の人達がたくさん配置されるようになってきている。スクール

カウンセラー、スクールソーシャルワーカーなどいろいろあるんですけど、今現状はそうなっている。その中で色々な人たちが、「学校で」子どもを中心に協力し合う形が必要だということになっている。民政委員さんも当然含めながら、ということになってきている。そこで起こることも基本的には同じです。言葉が通じない。何をどう話したらいいかわからない。意思疎通の場ではない。会議には集まるけれど、会議の形にはならない。形だけ連携になる。こういうことがこの分野のみならず、どの分野でも起こります。全国で起こっている。なのでその時にもいわゆる「コーディネーター人材」、私の言葉でいうと「通訳」のような人がいることが必要です。学校内外を繋ぐ。それは政治レベル、社会レベルの間にあるといえるかもしれません。

時間になりましたので、もう一回まとめて終わります。行動するということには3つのレベルがあります。

「対個人」、「対社会」、「対政治」。皆さん、どのレベルに関わられても良いですし、私は社会活動家と名のついています、社会活動家というのは1人3役を担っている。この3つをすることが社会活動家なのです。私は3つをやっていくつもりです。その比重はそれぞれあっても良いし、ひとつでも良い。とにかく何でも良いんですけど、その時に私として心掛けてほしいと願っておきたいのは、1つは「対人支援」において、「生活者として見る」。2つ目の「対社会」としては「耳を傾けてもらう」姿勢で関心のない人に臨む。3つ目の「対政治」は「49パーセントを捨てる覚悟でやる」です。その3つを私から皆さんへのひとつの行動指針への参考としてお伝えして私の話は終わります。ありがとうございます。